国立国語研究所学術情報リポジトリ

Usages of keigo (Japanese honorific/polite forms)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野元, 菊雄, NOMOTO, Kikuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001086

国立国語研究所報告79　研究報告集 5 (1984)

敬語の使い分け点

野元　菊雄

敬語というものは，いつも丁寧に言っていればいいというものではない。うまい使い方は，おそらく，多くの人（その言語社会の平均的な人）が丁寧に言う場面では丁寧に言い，丁寧でない場面では丁寧に言わないのがいいのであろうと思われる。

このようなうまい使い方を点数で示すために，昭和28年度の愛知県岡崎市の敬語の調査では「使い分け点」というものを考えた。約20年後の昭和47年度の調査の報告では，時間的な制約でこの「使い分け点」についての集計はできなかった。

今，この「使い分け点」について集計したので，これをここに報告する。この敬語調査については，昭和27～28年度の分は国立国語研究所報告11「敬語と敬語意識」として，昭和47年度の分は，同じく報告77「敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—」として発表されている。「使い分け点」については，報告11の方の267，275ページに述べてある。

267ページの算出方法をここに紹介しよう。被調査者に面接して，こういう場面ではどう言いますか，と聞いて書き取ってきた反応文がひとりの被調査者について13場面ある。この13は集計の目的によっていつもすべてが分析の対象とはなっていないが，それでも，場面によって丁寧な場面とそうでない場面がある。これらについては，前記報告書11及び77に出ている。この丁寧さは，各反応を丁寧さの高い順に1，2，3という段階点を与えて示した。

平均段階点からみて最も丁寧であった「医者」の場面と，最も乱暴な敬語形式の現れた「物売り」と，中間的であった「傘貸し」の合計三つの場面で，どの丁寧さの段階点を取っているかを見たものを使った。これが具体的

にどんな場面であるかは報告書を見ていただくとして，この三つを「医者」「傘貸し」「物売り」の順に並べて，段階点が1-2-3のようであれば，最も使い分けがうまいと認めて2点を与え，1-1-2，2-2-3，1-1-3，1-2-2，2-3-3，1-3-3 のように1か所だけで段階が下がっているものをその次として1点を与えた。三つの場面とも同じ段階であれば，場面によって敬語形式の丁寧さができないものと認めて0点とし，2-1-3 というようにどこかで1段階かえって上がるものを，使い分けを誤ったものとして－1点，3-1-2のようにどこかで2段階上がったものを，さらに誤りの程度がはなはだしいとして －2点とした。

昭和28年度の場合，このようにしたとき，2点の者は，431人中59人(13.7%）であり，－2点の者は3人（0.7%）であった。

以上のような「使い分け点」に対して，下がるべきところで下がったとき1か所につき1点を与え，逆に下がるべきところで上がったとき1か所につき －1点を与える，という計算法を今回新しく試みた。そして，この場合，このようにして点を算出するところが，「医者」と「傘貸し」との間で一つ，「傘貸し」と「物売り」との間で一つ，計二つあるから，両方が1点となれば合計で2点が最高であり，両方で －1点となれば合計で －2点となる。一方が1点で他方が －1点であれば0点となり，三つの場面とも同じ段階点であったための0点に人数では加わることになる。この新しい点を「新使い分け点」とすると，報告11で述べたものは「旧使い分け点」となる。「旧使い分け点」では0点は93人（21.6%）であったのが「新使い分け点」では 135人（31.3%）となる。

昭和47年度の調査では，比較のために上記と同じことをするとともに，前回調査では段階点2の者が多すぎていることもあって，別の観点から，丁寧さの段階点を1～5の5段階とする新しい段階点を各反応につけた。ただしこれは昭和47年度の調査で得られたものだけについてである。

これの結果の各段階別の分布などは，報告77の表6-2にあげてある。この表によると，段階1が各場面中一番多いのは「荷物預け」の場面である。以

下，段階2「医者」，段階3「先生」，段階4「傘貸し」，段階5「魚つり」である。段階1の「荷物預け」では，この場面で，一番段階点の多かったのは段階3であるが，他の四つの場面では，それぞれの段階点がそれぞれの場面の中で一番多かった段階点となっている。このため，平均段階点では「荷物預け」よりもむしろ「医者」の方が丁寧となっている。

さて，以上のように考えて，「荷物預け」を第1とし，順に「医者」「先生」「傘貸し」「魚つり」と並べて，段階点が1-2-3-4-5であれば，四つの場所で，右に行くにしたがって段階点が下がったのであるから，4点となり，これが満点である。この満点を取った人は11人で，これが全体の395人の2.8%に当たる。

ここでそれぞれの算出法で，多かった組み合わせを述べておく。

昭和28年の被調査者……2-2-3（47人，19.1%），1-2-2（41人，16.7%），2-2-2（40人，16.3%），1-2-3（36人，14.6%），組み合わせの数21。

昭和47年の被調査者……2-2-3（110人，27.8%），1-2-3(99人，25.0%），1-2-2（35人，8.8%），2-3-3（32人，8.1%）2-2-2（27人，6.8%）。組み合わせの数14。

昭和47年の被調査者（5段階）……3-2-3-4-5（15人，3.8%），3-2-3-3-5（14人，3.5%），3-3-3-3-5（12人，3.0%），3-3-3-4-5（12人），1-2-3-4-5（11人）。組み合わせの数195。

報告11の275ページ，第194表に昭和28年度の使い分け点による結果が出ている。この表は，人数が出ていないので，ここに表1としてこれを補って示すとともに，昭和47年度のものも合わせて示す。

階層については，昭和47年度は，特に調査はしなかった。いくつかの項目について，現在は調査は不適当と判断したからである。

また，居住経歴についても，両調査での調査でうまく対応しないので，報告11の第194表の補完という意味で，これらは昭和28年度調査の分だけを表示しておく。

昭和47年度は，前回に比べて，有意差をもって使い分け点が上がった，と

表 1　旧使い分け点（3段階）

		昭和28年			昭和47年		
		人数	平均	分散	人数	平均	分散
合計		431	0.668	0.7693	396	1.023	0.6131
性	男	213	0.728	0.7803	166	1.000	0.5783
	女	218	0.610	0.7516	230	1.039	0.6376
年齢	10代	80	0.675	0.6694	46	1.152	0.2160
	20代	115	0.704	0.7648	108	1.167	0.5278
	30代	80	0.850	0.8275	86	1.105	0.6053
	40代	68	0.632	0.7913	69	0.971	0.5789
	50歳以上	88	0.477	0.7268	87	0.736	0.8382
学歴	ナシ	14	0.286	0.6327	191	0.937	0.6453
	小学	89	0.562	0.8754			
	高小・新中	190	0.611	0.7430			
	新高・旧中	96	0.813	0.7565	148	1.101	0.5235
	高専上	38	0.947	0.5762	57	1.105	0.6907
階層	下	113	0.540	0.7440			
	中	225	0.7156	0.7458			
	上	81	0.7160	0.8700			
居住経歴	移動ナシ	139	0.655	0.7009			
	中間	187	0.583	0.8207			
	転々	103	0.845	0.7332			

いえる。すなわち，敬語の使い分けがうまくなった。

各アイテムの各カテゴリ間には，昭和47年度調査の方も前回同様有意の差は見られない。

両度の調査で大きく変わったのは，前回が男の方が女より点がよかったのに対し，昭和47年度は逆に女の方が点がよかった，という点である。上述したように男女間に有意差はそれぞれないから，性差については何ともいえない。

年齢では，前回は30代を頂点として，両側に低くなるという傾向を示していた。これを報告11では，社会的に最も活動している，あるいは年齢的に上

の者にも下の者にも多く接している30代が使い分けがうまいというように説明した。昭和47年度はこのピークが下に移行して，20代が一番高くなり，10代はそれほど低くなく，30代よりも高いのであるから，下への移行は相当はなはだしい。20代を二つに分けると，前半は56人で平均1.196，分散0.4793であり，後半は52人で平均1.135，分散0.5780であるから，ピークは20代前半ということになる。これは報告11で述べた理由とは結びつかないと思われる。

ともあれ，ピークに達してからは，年齢が高まるにつれて，使い分け点が低くなる点では両度の調査でも一致している。昭和47年度の調査で，50歳以上を，50代と60歳以上とに分けて計算すると，前者は35人，平均0.800，分散0.7886に対し，後者は52人，平均0.692，分散0.8669であり，上に述べた傾向はそのままあてはまる。

学歴は高いほど使い分け点が高いという点では両度の調査は同じ傾向であったが，昭和47年度には差はずっとちぢまっている。一般的な高学歴化とともに，言語に対する学歴のきき方が下がってくるという傾向の一つのあらわれであろう。

昭和28年度の調査の学歴で，昭和47年度調査の下の三つに当たるところを合計すると，人数293，平均0.580，分散0.7731となる。

性，年齢，学歴の各カテゴリが両度の調査で有意の差があるかどうかを見ると，年齢では30代と50歳以上，学歴では高専以上に有意差がないほかは，有意の差がある。30代では，前回は点が高かったのに，昭和47年度ではそう高くなかったということからこのようになったものと思われる。一番高い年齢層では，もちろん昭和47年度の方が高くはあるが，大きく点が上がらなかったのであろう。高学歴の人は，一般的には上がったが，前回でもある程度に使い分けをうまくやっていたといっていいかと思われる。

次に，新使い分け点について，以上と同じアイテムについて表2を作ってみる。

年齢では，この表2でも，旧使い分け点と同じく，昭和47年度調査ではピ

表 2　新使い分け点（3段階）

		昭和28年 人数	昭和28年 平均	昭和28年 分散	昭和47年 人数	昭和47年 平均	昭和47年 分散
合計		431	0.773	0.5005	396	1.088	0.4038
性	男	213	0.822	0.5409	166	1.066	0.3751
	女	218	0.725	0.4564	230	1.104	0.4239
年齢	10代	80	0.750	0.4625	46	1.152	0.2160
	20代	115	0.843	0.3929	108	1.204	0.4029
	30代	80	0.938	0.5586	86	1.163	0.4154
	40代	68	0.721	0.5837	69	1.029	0.4050
	50歳以上	88	0.591	0.4917	87	0.885	0.4236
学歴	ナシ	14	0.357	0.5153	191	1.005	0.4345
	小学	89	0.697	0.5709			
	高小・新中	190	0.726	0.4409			
	新高・旧中	96	0.906	0.5016	148	1.155	0.3475
	高専以上	38	0.974	0.4993	57	1.193	0.4014
階層	下	113	0.646	0.4942			
	中	225	0.804	0.5040			
	上	81	0.877	0.4539			
居住経歴	移動ナシ	139	0.727	0.5152			
	中間	187	0.733	0.4526			
	転々	103	0.913	0.5458			

ークは30代から20代に移っている。そして，20代を前半と後半とに分けても，前半56人，平均1.232，分散0.3568，後半52人，平均1.173，分散0.4508と同じような傾向を示していて，20代前半がピークである。このあたりについては，昭和47年度調査では，旧使い分け点では10代より30代が低いが，新使い分け点では逆に点が高いことが注目される。

高齢者の方は，昭和47年度調査では，50代35人，平均0.814，分散0.4784，60歳以上52人，平均0.865，分散0.3857となっている。

学歴では，昭和28年度調査の下の三つを合計すると，293人，平均0.700，分散0.4901となる。

性・年齢・学歴について，すべてのカテゴリでは，学歴の上を除くと有意差がある。高学歴でも点数は上がったもののその上がり方は中，低学歴層に比べて少なかったといえるわけである。旧使い分け点で差の見られた，年齢の二つの年齢層においても新使い分け点で有意差が認められなかったのは，一つには新使い分け点の方が分散が小さいという点も理由として考えられる。新使い分け点では，全体と性とについて参考として表3に示すように，分布がまとまり，0点が多くなっている。

表 3　旧新使い分け点の分布（3段階）

		昭和28年						昭和47年					
		2点	1点	0点	−1点	−2点	計	2点	1点	0点	−1点	−2点	計
合計	旧	59	226	93	50	3	431	99	233	39	24	1	
	新	59	226	135	11			99	233	64			396
性 男	旧	35	112	39	27		213	37	103	15	11		166
	新	35	112	59	7			37	103	26			
性 女	旧	24	114	54	23	3	218	62	130	24	13	1	230
	新	24	114	76	4			62	130	38			

表3によれば，新旧の点数算出法が，段階点が下がるべきときに上がるというマイナスの点の扱い方の差であることを反映して，2点，1点のところには変動はない。

特に昭和47年度調査の方が分散が小さいこともこの分布からわかる。新使い分け点では昭和47年度調査はすべてが0点以上である。

ついでにいうと，昭和47年度の調査では，これまでの表によっても，男41.9%に対して女58.1%と，女が大変多くなっていることが指摘される。この調査時点での全国標準人口では男49.2%，女50.8%（ただし，調査年数に応じた15歳から79歳までは男48.7%，女51.3%）であり，われわれの調査地点では全人口が男48.7%，女51.3%（調査年齢で男48.2%，女51.8%）であった。サンプリングの結果は男167人(41.75%)，女233人(58.25%)であり，年齢別構成には大きな差はなかったのであるが，性別構成では女が多かっ

た。

図 1　表 1，表 2 の平均について

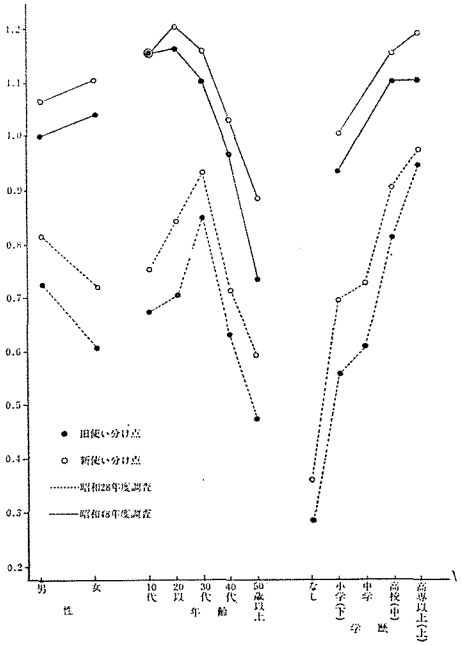

表 1 と表 2 の両度の調査で共通しているアイテムについて，各カテゴリの平均点を結んだのが図 1 である。

新旧二つの使い分け点について，ここでは六つの組み合わせがある。そのうち，そのアイテム中最高と最低の差を見ると，性の昭和47年度調査ではほとんど差がないのを別とすれば，学歴の昭和47年度だけが新使い分け点の差の方が差が大きいのに対し，他の四つはすべて旧使い分け点の方が差が大きい。この点だけからいうならば，旧使い分け点の方が弁別力があっていいといえる。しかし，このような算出法は弁別力だけで評価すべきではない。このことについては後に述べる。

昭和28年度調査については，学歴の方が年齢よりも最高・最低の差が大きいが，昭和47年度となると逆に年齢の方が大きくなっている。これは前に述べたように，学歴の言語に及ぼす影響力の低下という点で他のものと軌を一

にするものといえよう。もっとも，昭和47年度の場合，無学歴といった人がいなくなったために差が小さくなったと考え得るが，この事実こそが，高学歴化と平均化とのあらわれであり，この故に学歴が言語能力に及ぼす力を失ったのである。

両度の調査の比較という観点から図1を見ると，以上のことからもわかるように，新使い分け点同士，旧使い分け点同士で比べると，年齢では昭和47年度の方が差が大きいのだけを例外として，あとは昭和27年度の方が差が大きい。学歴だけでなく，全体として平均化に向かっているのかとも思われる。

上述のように旧使い分け点の方が弁別力は強いのであるが，この算出方法には一貫性を欠いているところがある。すなわち，平均的に下の段階の場面になるところで段階点が下がったとき1点を与えており，そこでは何段階下がったかを問題にしていない。にも拘らず逆に段階点が上がったときに何段階上がったかを問題にしている。この点で一貫性を欠いている。

何故下がるとき何段階下がった（乱暴になった）かを問題にしなかったかはたとえば1-2-3とあるときと，1-3-3とあるときが共に2点となって同じ点となるのは不合理であると考えたからである。使い分けということを考えるとするならば，1-2-3 の方に高い点が与えられた方が理にかなっている。

1-2-1 のようなときは，旧使い分け点では −1点となる。ここでは2番目の場面から3番目の場面で逆に上がったことだけが問題とされて，正しく使い分けた，1番目の場面から2番目の場面へのところが全く考慮されていないこととなる。そこで，この正しく使い分けたところを1点とし，先の −1点と合計して0点とするのが新使い分け点である。

上がるときも何段階上がったかは問題としなかった。たとえば，3-1-2 は0点となる。3から1へ逆に上がるのを誤りの程度がはなはだしいとして −2 点とする，旧使い分け点の考え方も，これが1から2への1点と同価と見るのが適当か，という点から考慮する余地はないではないが，3-2-1 とい

うのと，3-1-1 というのとはやはり差をつけたかったのである。

昭和47年度調査で得られた反応文については3段階の段階点の他に5段階の段階点に分けることも試みた。この5段階のものについて，はじめに述べたように考えて，使い分け点を計算したものを表4として示す。

表 4　新使い分け点（昭和47年）（5段階）

		人数	平均	分散
合計		395	1.314	1.1420
性	男	166	1.241	1.1588
	女	229	1.367	1.1231
年齢	10代	46	1.391	1.1512
	20代	108	1.704	1.1900
	30代	86	1.279	1.0151
	40代	69	1.203	0.8284
	50代	35	1.057	1.3110
	60歳以上	51	0.804	0.9027
学歴	下	190	1.132	0.9880
	中	148	1.372	1.2200
	上	57	1.772	1.1234
職業	1	119	1.454	1.2395
	2	28	0.857	0.7653
	3	64	1.094	0.8662
	4	69	1.493	1.1485
	5	33	1.606	1.5721
	6	38	1.237	0.9702
	7	44	1.114	0.9189
出生地	1	188	1.282	1.1067
	2	97	0.856	1.1338
	3	30	1.700	1.0100
	4	17	1.529	1.1903
	5	41	1.366	1.1101
	6	22	1.545	1.2479

特にここでは，何段階上がったか下がったかということを考えると事が複

雑になるので，新使い分け点だけを出している。表4では今までに省略してきた職業・出生地についても示してみた。ただしこれについてのコメントはここでは省略する。

表4では，合計の人数が395であって，表1，2より一人少ない。これはこの方は集計に使ったのが5場面であって，反応を示さなかった人が一人増えたためである。

性・年齢・学歴では，年齢で20代と30代との間，学歴で中と上との間に有意差がある。

なお，年齢では20代が一番高い点では3段階の昭和47年度の場合と同じである。また，20代前半は56人，平均1.821，分散1.0395，20代後半は52人，平均1.577，分散1.3210で前半の方が高い点も同じである。このようにすると，それぞれ隣りの年齢層間に有意差はなくなる。

年齢の高いところを50歳以上にまとめると86人，平均0.907，分散1.0844となり，これは40代との間に有意差はない。

表3にならって使い分け点の分布を表示すると，表5のようになる。

表 5　使い分け点の分布（昭和47年度）（5段階）

		4点	3点	2点	1点	0点	−1点	計
合計		11	37	117	143	74	13	395
性	男	5	12	47	64	30	8	166
	女	6	25	70	79	44	5	229
年齢	10代	1	6	13	18	6	2	46
	20代	7	16	37	36	10	2	108
	30代	1	9	24	33	17	2	86
	40代		3	26	24	14	2	69
	50代	1	3	7	12	10	2	35
	60歳以上	1		10	20	17	3	51
学歴	下	3	13	44	83	40	7	190
	中	2	21	47	44	28	6	148
	上	6	3	26	16	6		57

分散が大きいことはこの表からもわかる。4点が11人いることは前に述べたが，最低点は－1点で13人（3.3%）である。「魚つり」の場面には段階1はいないから，考え得る最低点は，5-4-3-2-2という－3点であるが，このタイプは一人もいなかっただけでなく，2-1-4-3-2などといった－2点もいなかったことになる。

図 2　表4の平均について

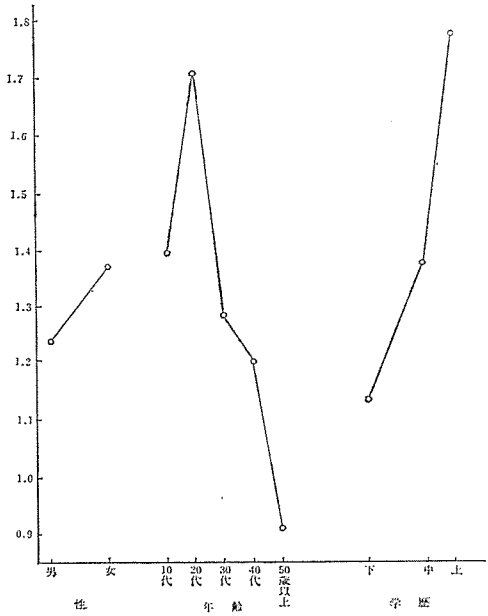

表1，2から図1を得たように，表4から一部を図2として作ってみた。視覚的に3段階と5段階とが比較しやすいように考えてのことである。

図1と同じスケールで示したが，図2の方が段階が多いこともあって，図1の各アイテムの一番上の線とが対応するが，この方が弁別力は高いといっていい。図1と2とは大体は同じ傾向にあるが，二つを比べると，図2（すなわち表4）では，30代の方が10代より低い。このこともあって，図2では30代と40代との差があまり大きくない。学歴では図2は中と上との差が大き

くなっている。この大きさの故に，上述のように20代と30代との間とともに，ここでも，分散の大きいのにも拘らず有意差が出たのである。

岡崎市における敬語調査については，報告書が前述のように，国立国語研究所報告77「敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—」として出ている。小文は，この報告書に盛らなかったことで，次々に報告しようと考えている最初のものである。

この調査ではなお，パネル調査の被調査者についても使い分け点を3段階の新旧および5段階について算出したが，ここではこれは省略する。

このパネル調査については，報告77では，全員についての分析しかしていない。鶴岡市での標準語化の調査では，国立国語研究所報告52「地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較—」で，個人ごとの追跡調査をも試みて報告した。すなわち，このレベルの分析がまだ敬語の調査ではされていない。次回はパネル調査について，このようなことを取り上げる予定である。

鶴岡市の場合は，前回調査の被調査者508人中，126人(24.8%）の所在がわかり，そのうち19人が調査不能であり，結局107人(21.1%）を調査した。岡崎市では前回の被調査者434人中，198人（45.6%）が20年後に所在が明らかになった。鶴岡市と比べて相当の高率であった。そのうち13人が調査不能で，調査できたのは185人であり，これは42.6%に当たることになる。